

障がい者スポーツの認知度の現状
～北海道における障がい者スポーツ大会に着目して～

札幌大学東原ゼミ A 班 清崎鉄馬 澤野康介 秋山愛莉 小島加奈恵

1.背景

2008年に障がい者を対象に行った「障害者施策総合調査」によると「障がい者」の40.5%が、「何らかのスポーツ・芸術活動に参加している」という実態がある。「障がい者」がスポーツを行う理由は大きく、リハビリテーションといった医療的側面と「生きがい」や「楽しい」といった精神的側面に分けられる。最近ではパラリンピックがテレビなどのメディアで取り上げられるようになってきており、こうした現状は「障がい者」が積極的にスポーツを行うようになったことや、さらに競技の普及した現れであるが、その認知度はオリンピックなどのいわゆる「健常者」が行うスポーツと比べてまだまだ低いと言える。障がい者スポーツの現状を把握する際、障がい者スポーツにおける認知度や興味の変化を調べた、和久田・石塚の研究が1つの示唆を与えてくれる。その内容は2003年11月に静岡県内で「第3回全国障がい者スポーツ大会」が行われた際に、地域住民（小・中・高校生）を対象に障がい者の認知度に関するアンケート調査を行った結果、開催の前後で認知度に変化があることを明らかにしたものである。その中では、障がい者スポーツ大会の認知度についても調査しており、大会開催前に行った調査を見ると「パラリンピック」について「知っている」が69.1%、「聞いたことがある」が24.5%、「知らない」が6.4%だった。また「全国障がい者スポーツ大会」についても「知っている」が22.3%、「聞いたことがある」が34.6%、「知らない」が43.1%とパラリンピックに比べて全国障がい者スポーツ大会の認知度は低かった。

さらに健常者における「障がい者スポーツとの関わり」においても、障がい者スポーツに参加している場面を「実際に見たことがある」と答えたのは7.7%、「テレビなどで見たことがある」が74.1%、「見たことがない」が18.2%と、障がい者との「直接的な関わり」が薄いことが読み取れる。こうした実態を踏まえて、本研究ではいわゆる「健常者」と呼ばれる人々たちが障がい者スポーツへの興味・関心を高めるための「場」をどのようにして作っていけばよいのかを念頭に置きながら考察を進めていく。

2.目的

本研究における目的は2020年に東京オリンピック開催が決まったことなどを踏まえて、オリンピックだけでなく、パラリンピックも盛り上げていくために、障がい者スポーツそのものの認知度を高めていく必要があると考える。そのため、実際に北海道で開催されている障がい者スポーツ大会の現状を把握し、「障がい者」と「健常者」が相互に理解・関心を高めていくための両者が楽しむことのできる「場」を考えていき、障がい者スポーツをより充実させたものへとしていく。

3.障がい者スポーツの現状

障がい者のスポーツ行う目的としては上記でも述べたようにリハビリテーション効果といった医療的側面と「生きがい、楽しみ、ストレス発散」といった精神的側面がある。笹川スポーツ財団が2013年に行った「障害児・者のスポーツライフに関する調査」によると障がい者のスポーツ・レクリエーションを行う目的としては「健康の維持・増進のため」が最も多く、そのほかは障がいの種類に応じて、「気分転換・ストレス解消のため」や「楽しみのため」、「リハビリテーションの一環」といった理由が上位に来ている。

	肢体不自由車椅子必要	肢体不自由車椅子不要	視覚障害	聴覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他音声・言語そしゃく機能障害や内部障害を含む
	N=61	N=273	N=92	N=110	N=13	N=46	N=322	N=186
健康の維持・増進のため	26.2	36.7	38.0	36.4	30.8	45.7	34.2	39.2
気分転換・ストレス解消のため	13.1	16.5	23.9	29.1	15.4	26.1	30.7	21.0
楽しみのため	18.0	11.0	10.9	15.5	15.4	4.3	8.1	11.8
友人や家族との交流のため	8.2	6.8	8.7	7.3	0.0	6.5	5.6	6.5
健常者との交流のため	3.3	0.4	0.0	0.0	7.7	0.0	1.2	1.1
体型維持・改善のため	4.9	3.0	6.5	6.4	7.7	4.3	9.0	3.8
リハビリテーションの一環として	21.3	22.8	7.6	1.8	7.7	8.7	8.4	14.0
目標や記録への挑戦のため	4.9	2.1	3.3	3.6	15.4	4.3	1.6	1.1
その他	0.0	0.8	1.1	0.0	0.0	0.0	1.2	1.6

笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

障がい種別の特徴を見ていくと肢体不自由が「リハビリテーションの一環」を目的として行っているのが多いが、そのほかの障がい者は「気分転換」や「楽しみ」といった「精神的側面」を重視していることが多かった。このことからスポーツによる人との関わりに対しては精神的に前向きであると考えられる。

実際、健常者による障がい者への関わりがどの程度あるのかというと、2006年静岡県裾野市「市民調査」によると何らかの形で関わったことがあるのが3.4%、障がい者スポーツ大会は知っているが内容は知らないが76.1%、全く知らないが17.6%と関わりの低さが見てとれる。また、障がい者がスポーツを実施するうえでの相手というのは家族や友人が多く、その他の関わりが少ないというのが現状である。よって障がい者のスポーツでも関わりというのは身近なものばかりでスポーツを通しての交流が少ないことから認知の低さへとつながってしまっていると考えられ、「場」や「機会」をいかに作るからこそができるかが認知度の向上につながっていくのではないかと考えられる。

4.北海道障害者スポーツ大会の調査

①札幌市すずらんピック

【日時】一回目：2014年5月18日札幌市身体障害者福祉センター

卓球（身体、知的対象）

二回目：2014年5月24日札幌市白石区体育館

バスケットボール（知的対象）

三回目：2014年6月1日札幌市円山陸上競技場

陸上（身体、知的対象）

【内容】観戦者状況、大会の認知度

②北海道車椅子バスケットボール大会

【日時】2014年6月28日札幌市西区体育館

車椅子バスケットボール

【内容】観戦者状況、大会の認知度

5.結果および考察

まず、すずらんピックの結果を見ていくと、一回目の卓球と二回目のバスケットボールで共通しているのは観客のほとんどが家族や親戚といった身内ばかりであった。逆に三回目の陸上だと選手数が多かったこともあり、観客が多く見られ、また陸上大会にはボランティアも関与していた。陸上大会に関しては一回目、二回目と比べても認知度が高いほうだったといえる。その他、選手を除いて20代、30代といった若い人たちがどの大会でも見受けられず、審判などでも年齢層が高いことより、若い人たちの障害者への関心はあまり高いものとはいえないものであった。

次に車椅子バスケットでは参加チームが少なかったこともあり、観客数が30人程度と少ない結果であった。しかし、車椅子バスケットでは各チーム内に一人健常者を混ぜ、男女混合で試合を展開していくといった障害者と健常者との直接的な関わりを取り入れていた。また、ルールもさほど一般のバスケットボールとはかわっておらず、勝敗の決め手は車椅子操作をどれだけうまくできるかといった一般人でも入り込みやすいものであった。

結果二つの大会であげられる共通課題は健常者との関わりを増やし、障害者スポーツ参加人口を増やすことにあると考えられる。そうすることによって自然と観戦者数も増えていき一般人の認知を上げることへとつながっていくのではないかと考えた。

6.政策提言

①札幌大学を利用したブラインドサッカーによる障がい者との交流授業

・ブラインドサッカーとは

視覚障がいの選手による5人制サッカーであり、フィールドプレーヤーはアイマスクとヘッドギアを装着する。選手は鈴が入ったボールの音やゴール裏から指示を出すコーチの指示を頼りにプレーをしていく。

・なぜ札幌大学でブラインドサッカーなのか

今月 8 月、パラリンピックの正式種目でもあるブラインドサッカーのチーム「ナマール北海道」が北海道内で初めて設立された。そうしたことから、大学での交流授業をきっかけにブラインドサッカーという障がい者スポーツを体験してもらい、健常者に興味・関心を持ってもらうことが狙いである。札幌大学では年に一度、学生が企画して授業を行う「スペシャルウィーク」といった期間があり、そこでブラインドサッカーを取り扱うことにより、まず学生たちが障がい者スポーツに接する機会を作る。さらには、大学がサッカーをするための環境が確保されていること、全国常連のサッカー部員らのサポートを借りることもできることや、大学周辺には、小・中・高の学校もあるため、企画次第では幅広い世代を巻き込みながら、障がい者スポーツを知ってもらう「場」を作ることができる。また、そうした取り組みの延長戦として、札幌大学内でブラインドサッカー大会等を実際に企画し、健常者よ障がい者がスポーツを通じて交流ができる「場」を作ることが大切である。

②大学内ニュー障がい者スポーツ教室の開設

札幌大学における「地域スポーツ・文化総合型クラブ」である「めえ〜ず」などと連携を図りながら、学生と障がい者が同じように楽しめる「新たな障がい者スポーツ」考案し行っていく。そうすることで 1 人のメンバーとしてスポーツを楽しむことができ、相互理解にもつながっていく。また、学生と障がい者がニュー障がい者教室でつながりをつくることでお互いのスポーツの幅が広がり、少しでも障がい者スポーツが盛り上がっていく一つのきっかけになっていけばいいのではないかと考えた。

7.まとめ

障がい者スポーツ認知度を上げるためには、今後の未来を担っていく若い世代が障がい者スポーツに対する興味・関心を高めていくことが大切である。そのためにも障がい者との関わりは必要不可欠であり、上記で述べたように、スポーツを通してお互いが「交流する場」を設けていくことが必要であると考えた。

8.参考文献

・和久田佳代・石塚和重 2005 年「全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響」

・笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

http://www.ssf.or.jp/research/report/pdf/contract2013_2-1.pdf

・大橋俊二 2006 年「裾野市市民調査」

<http://www.city.susono.shizuoka.jp/ma/download/2516/4-5.pdf>